

<大阪府指定文化財 有形文化財（考古資料）>

名 称	いけがみそねいせき だいごういど しゅつどどき 池上曾根遺跡（第5号井戸）出土土器
員 数	弥生土器 9点
所在地	和泉市池上町四丁目8番27号 （大阪府立弥生文化博物館）
所有者	大阪府
年 代	弥生時代後期

説 明

○池上曾根遺跡の概要

池上曾根遺跡は、和泉市池上町から泉大津市曾根町にかけて所在し、和泉山脈から大阪湾へ流れ込む榎尾川によって形成された扇状地が段丘化した地形面に立地している（図1・2）。集落は東西を河川で開析された、南北に延びる微高地上に展開している。

本遺跡は明治36年（1903）頃に発見され、昭和30年代から分布調査等が実施された。本格的な発掘調査は、昭和44～46年（1969～1971）、第2阪和国道（現：国道26号）建設に伴い、第2阪和国道内遺跡調査会によって実施された。昭和51年（1976）、国史跡に指定されて以降、和泉市教育委員会や泉大津市教育委員会、大阪府教育委員会によって、指定地内外において、断続的に発掘調査が実施された。

これらの調査成果から、以下のように集落が変遷することが明らかになった（図3）。本遺跡は弥生時代前期中葉に集落として営まれはじめる。前期後葉に環濠をめぐらせた集落となり、環濠の内外に複数の小規模集団の居住域が形成され、環濠外側の南部には方形周溝墓ほうけいしゅうこうぼが築かれる。中期初頭には内濠（第1環濠）が掘削、環濠内に居住域がまとまって形成され、前段階と同様に環濠の南側には方形周溝墓が築かれる。中期前葉になると第1環濠は埋め戻され、中期中葉～後葉には内濠（第2環濠）と外濠が掘削され、環濠内の中心部には大型掘立柱建物や大型割り抜き井戸が建造され、集落は最盛期を迎える。中期末には、環濠は維持されなくなり、大型掘立柱建物や大型割り抜き井戸は埋没し、後期になると、新規に環濠が掘削されることはなく、竪穴建物や井戸が散在するのみとなる。これまでの大規模環濠集落としての機能は失われ、集落は縮小・分散化していき、衰退期を迎える。こうした変遷のうち、本資料は後期の井戸から出土したものである。

○出土遺構（第5号井戸）の概要（図4・5・6・7）

本資料は1970年（昭和45）に第2阪和国道内遺跡調査会による発掘調査でJ地区において検出した第5号井戸⁽¹⁾から出土した、絵画・記号土器を含む一括資料である。1970年の調査

区はJ・K・L・N・H区の5つであり、J地区では方形周溝墓や甕（壺）棺、井戸、竪穴遺構を検出している。第5号井戸は井戸枠を設けない素掘りの井戸で、平面形態が径約1.1mの不整形円形、深さは1.9mを測る。

井戸の埋土は5層に分層できるが、本資料は最下層の黒色腐食土層（図7—⑤）からまとも出土したものであり、弥生時代後期中葉の时期的特徴を示している。これらの土器の出土状況は、多くが横倒しになっていたものの、残存状態が良く、当初の器形を保っている個体が多いことから、本資料は流入、落下、投棄といった要因によるものとは考えにくく、意図的に井戸に入れられたと考えられる。

上層の黒色粘質土層（図7—②）より、弥生時代後期後葉の土器が出土しており、井戸は弥生時代後期中葉に機能したのち、弥生時代後期後葉には埋没していったと考えられる。

○出土土器の概要（表1・図10）

本資料は長頸壺5点（うち絵画・記号土器3点、穿孔土器1点）、広口壺3点（うち記号土器2点、穿孔土器1点）、広口短頸壺1点（穿孔土器）の計9点で、第5号井戸の最下層出土の一括資料を構成するすべてである⁽²⁾。いずれも残存状況は良好で、製作時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

【絵画・記号土器】（図7）

・土器1：長頸壺（図8—1、図11・12）

完形品で、口頸部高は胴部高よりやや低く、口縁端部は丸くおさめられており、口頸部はわずかに外反、胴部は無花果形を呈する。底部は摩耗している。

本資料の胴部外面には、絵画と記号が確認できる。絵画については、緩い横「S」字状の二重線の上下に、湾曲した三角形の突起が複数表現されている。図像表現の特徴から、「S」字状の線刻は胴部、その上側の三角形の突起は角、耳、鬣、後肢、下側の三角形の突起は下顎、前肢を表現していると考えられることから、この絵画は「龍」⁽³⁾を表現したと認識されている。絵画の大きさは幅約10cm、高さ約6cmで、線刻の切り合い関係から、まず「S」字状の線刻を描画したのち、三角形の突起を描いたと考える。

また、この絵画と並列して、綾杉状の記号が確認できる。1本の縦線を中心に左側に4本の斜め左下に延びる線、右側に5本の斜め右下に延びる線が描かれており、「稲妻」⁽⁴⁾を表現したと考えられている。その大きさは幅約9cm、高さ6cmである。線刻の切り合い関係から、まず「龍」を描画し、胴部下半をナゲ消したのちに、中心線を描いてから、両側の斜線を描いたと考える。線の太さの違いから、「龍」の絵画の方が先端の尖ったヘラ状工具で描画されていることがわかる。

・土器2：長頸壺（図8—2、図13）

完形品で、口頸部高は胴部高よりやや高く、口縁端部は丸くおさめられており、口頸部はわずかに外反、胴部は無花果形を呈する。

本資料の胴部外面の肩部には、2本の弧線で表現された鱗状の記号があり、大きさは幅約4cm、高さ約3cmである。表現の特徴から「龍」の「鱗」⁽⁵⁾である可能性が指摘されている。

・土器3：長頸壺（図8—3、図14）

完形品で、胴部外面の肩部には、記号がある。口頸部高が胴部高よりやや低く、頸部は直立気味に立ち上がり、口縁部にかけて外反したのち、わずかに下垂し、口縁端部では面を形成、胴部は球形を呈する。

胴部外面の肩部には「し」字状の弧線の下に4本の単線が垂下するように表現された記号が確認でき、その大きさは幅約5cm、高さ約4cmである。「し」字状の弧線は胴部、4本の単線は四肢を表現したと考えられ、四足獣⁽⁶⁾を描画したと認識されている。線刻の切り合い関係から、胴部を描画してから、四肢を描いたと考えられる。

・土器4：広口壺（図8—4、図15）

完形品で、胴部と頸部の境部分に列点の記号が確認できる。短い頸部から口縁部にかけて外反、端部はわずかに上方に肥厚し、胴部は球形である。胴部と頸部の境部分には、幅約8.3cmの範囲に幅約1.1cmの間隔で長さ約0.6cmの短線が8条刻まれる。なお、この記号は全周しない。

・土器5：広口壺（図8—5、図16）

胴部下半が欠損する土器で、5条の縦短線の記号が確認できる。頸部から口縁部にかけて大きく外反し、端部はわずかに下方に肥厚し、胴部は球形である。口縁端部には、凹線文が施される。胴部外面の肩部には、幅約2cmの範囲に幅約0.6cmの間隔で長さ約1.4cmの短線が平行して5条刻まれる。

【穿孔土器】

・土器6：長頸壺（図8—6）

完形品で、線刻はない。口頸部高が胴部高より低く、口縁端部は丸くおさまられている。口頸部はゆるやかに外反し、胴部は卵形を呈する。胴部下半には、外から内へ焼成後穿孔があり、その大きさは直径約1.5cmである。

・土器7：広口壺（図8—7）

完形品で、線刻はない。頸部から口縁部にかけて外反、端部はわずかに下方へ肥厚し、面を形成し、底部は著しく摩耗している。胴部上半に外から内へ焼成後穿孔があり、その大きさは直径約1.0cmである。

・土器8：広口短頸壺（図8—8）

底部の一部と口縁部の一部を欠損する土器で、線刻はない。口縁部は「く」の字状に大きく外反し、胴部は横に広がる。底部に焼成前穿孔があり、その大きさは直径約2.2cm（復元）である。

【その他の土器】

・土器9：長頸壺（図8—9）

胴部下半部が欠損している土器で、線刻はない。残存状況から口頸部高が胴部高より高いと考えられる。口縁端部は丸くおさまられ、頸部下半はやや内傾^{ないけい}、口縁部からわずかに外反し、胴部は無花果形を呈する。

○評価

本資料は残存状況が非常に良好であることから、土器に描かれた図像表現の全体形を認識でき、かつ器種との対応関係も把握できる。また、出土状況が明確であることから、これらの土器群の用途を推測でき、その資料的価値は高い。

弥生時代の絵画・記号土器は、前期後半から後期まで確認されており、図像表現の特徴は時期によって変化する。特に後期に大きな変化がみられ、中期までの写実的で具象的な表現から、後期になると図像を部分的に省略・簡略化した単純で抽象的な表現に変わる。本資料の土器2・3はこうした変化の典型例といえる。加えて、後期になると「龍」と推測できる図像が土器絵画の画題に新たに採用されるようになる。こうした「龍」とされる図像表現には、各部位を省略・簡略化することなく「龍」のイメージを鮮明に表現したものから、部分を省略・簡略化したと想定される単純で抽象的な表現まで存在している。本資料の土器1は「龍」の各部位を省略することなく描画されていることから、土器に表現された「龍」の起点となる資料と考えられる。このように本資料は、弥生時代後期の絵画・記号土器における図像表現の特徴を如実に示すものであり、当該期の土器絵画を知る上で重要な資料である。

全国的にみても、絵画・記号土器は破片資料が多く、完形品は少ない傾向にあり、大阪府内の「龍」の絵画・記号土器もほとんどが破片資料である（表2）。本資料は、完形品の絵画・記号土器を多く含むことから、図像表現全体を把握できる重要な資料である。また、長頸壺（土器1～3）には絵画・記号土器、広口壺（土器4・5）には記号土器が対応するように、絵画・記号と各器種との対応関係もうかがうことができる貴重な資料である。

出土状況については、前述したように第5号井戸の最下層から意図的に入れられた状態で一括出土しており、これら土器群には絵画・記号土器に加え、仮器化された穿孔土器が含まれている。こうした特殊な様相から、本資料は井戸や水に関わる祭祀に用いた可能性を推測できる。大阪府内の「龍」の表現をもつ絵画・記号土器をみても、出土状況や共伴資料からその用途を推測できる資料は少なく（表2）、本資料は用途を推測できる点においても重要である。

上述のように、本資料は残存状況が良好で絵画・記号表現の全体形を認識することができるため、弥生時代後期における図像表現の変化や器種との対応関係を把握することができる点で、弥生時代の絵画土器研究の基礎資料となり得るものである。さらに、出土状況が明確であるため、共伴土器の特徴と合わせて、弥生時代後期における土器を用いた祭祀のあり方を示すことができる点でその資料的価値は高い。以上のことから、本資料は大阪府指定文化財としてふさわしいものと評価できる。

[註]

(1) 第2阪和国道内遺跡調査会 1970・1971 では、「J-2号井戸」とされていたが、大阪文化財センター1979において、第5号井戸（SG108）に改称された。

(2) 調査図面と写真から、第5号井戸の最下層より出土したことが明らかなものを指す。

(3) 春成秀爾「10 弥生土器の龍」（『祭りと呪術の考古学』塙書房 2011）

(4) 前掲註3、春成。

(5) 大阪文化財センターの報告では、「鳥のくちばし状の記号紋」とするが（大阪文化財センター1979）、春

成秀爾らにより「龍」の「鱗」とされた。(春成 2011、永野 2014 ほか)

(6) 大阪文化財センター1979 ほか、春成 2011 では、「鹿」と評価している。

[参考文献]

秋山浩三『〈改訂版〉弥生実年代と都市論のゆくえ 池上曾根遺跡』シリーズ「考古学を学ぶ」023
新和社 2023

乾哲也「池上曾根遺跡の変遷と周辺遺跡の動向」『池上曾根遺跡の研究』和泉市史紀要第31集 和泉市史編さん委員会 2022

上田裕人「弥生時代中期後半における池上曾根遺跡の集落内部構造について」『ヒストリア』289号
大阪歴史学会 2021

宇野隆夫「井戸」『弥生文化の研究』7 雄山閣出版 1982

大阪文化財センター『池上遺跡 第2分冊 土器編』1979

鐘方正樹『井戸の考古学』同成社 2003

小林和美「池上曾根遺跡の地理と地形」『シンポジウム 池上曾根遺跡からの新視点 弥生時代の人・社会・風土』「文部省科学研究費（地域連携推進研究）古人骨と動物遺存体に関する総合研究」シンポジウム実行委員会 2000

佐原真「弥生土器の絵画」『考古学雑誌』第66巻第1号 日本考古学会 1980

第2阪和国道内遺跡調査会『昭和45年度 第2阪和国道内遺跡発掘調査報告書』3 1970

第2阪和国道内遺跡調査会『池上・四ツ池遺跡』16 1971

田中清美「弥生時代および古墳時代前期の井戸の祭祀と意義」『坪井清足先生卒寿記念論文集—埋文行政と研究のはざままで—』下巻 坪井清足先生の卒寿をお祝いする会 2010

永野仁「龍絵画土器小考」『弥生文化博物館研究報告』第7集 大阪府立弥生文化博物館 2014

日色四郎『日本上代井の研究』日色四郎先生遺稿出版会 1967

灰掛薫「池上曾根遺跡の調査のあゆみ」『シンポジウム 池上曾根遺跡からの新視点 弥生時代の人・社会・風土』「文部省科学研究費（地域連携推進研究）古人骨と動物遺存体に関する総合研究」シンポジウム実行委員会 2000

春成秀爾「絵画から記号へ」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集 国立歴史民俗博物館 1991

春成秀爾『祭りと言術の考古学』塙書房 2011

藤田三郎「弥生時代の井戸—奈良・大阪の井戸を中心に—」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズIV 1988

[図版出典]

図1：国土地理院地図をもとに作成

図2：小林 2000 を一部改変

図3：乾 2022 に加筆

図4・5・6・7・9：第2阪和国道内遺跡調査会 1971 を一部改変

図8：大阪文化財センター1979 を一部改変

表1 指定資料一覧

個別 番号※	器種	法量※				残存	備考
		口径	胴部径	底径	器高		
1	長頸壺	12.7	15.9	5.2	27.8	完形	絵画・ 記号
2	長頸壺	12	15.9	4.3	25.4	完形	記号
3	長頸壺	13.7	18.7	5.4	33.7	完形	記号
4	広口壺	13.6	20	5.8	22.7	完形	記号
5	広口壺	13.2	15.9	—	(18.7)	底部欠 損	記号
6	長頸壺	12.3	14.9	5.8	26.8	完形	穿孔
7	広口壺	11.6	16.5	4.8	23	完形	穿孔
8	広口壺	8.9	25.7	6	21.9	完形	穿孔
9	長頸壺	9.5	18.2	—	(24.8)	底部欠 損	

(※)

- ・個別番号については、本文中の土器番号、及び図8の実測図右下に付した番号と一致する。
- ・法量の単位はcm、括弧内の数値は復元である。

表2 大阪府内での「龍」の絵画土器一覧

番号	遺跡名	所在地	時期	器種	残存	出土遺構
1	安満	高槻市	後期	広口壺	胴部一部欠損（破片接合）	土壇
2			後期	長頸壺	胴部一部欠損（破片接合）	周溝墓周溝
3	芥川		後期前半	広口壺	破片（口頸部片）	西大溝
4	古曽部・芝谷		後期前半	壺	破片（胴部片か）	包含層
5			後期前半	壺	破片（胴部片か）	包含層
6			後期前半	壺	破片（胴部片か）	包含層
7			後期前半	壺	破片（胴部片か）	包含層
8			後期前半	壺	破片（胴部片か）	包含層
9			後期前半	壺	破片（胴部片か）	包含層
10			後期前半	長頸壺	破片（胴部片）	竪穴建物
11			後期前半	器台	破片（胴部片）	環濠
12	東奈良	茨木市	後期前半	長頸壺	破片（口頸部片）	沼状落ち込み
13			後期	小型壺	破片（口縁部～胴部片）	—
14			後期前半	広口壺	破片（胴部片）	土坑
15			後期前半	壺	破片（胴部片）	—
16	新免	豊中市	後期	壺	破片（胴部片）	竪穴建物
17	瓜破	大阪市	後期	広口壺	底部欠損	表採
18	西ノ辻	東大阪	後期	長頸壺	破片（頸部片）	—
19	亀田		後期	長頸壺	破片（口頸部片）	高まり
20	恩智	八尾市	後期後葉	広口壺、短頸壺？	完形	溝
21	八尾南		後期中葉	長頸壺	口縁端部欠損	谷
22			後期中葉	長頸壺	破片（体部片）	竪穴建物排水溝
23				壺蓋	破片（口縁部欠損）	井戸
24	船橋市・柏原市	藤井寺市	後期中葉	長頸壺	完形	採集
25		市・柏	後期後葉	長頸壺	口縁部欠損	採集
26		原市	後期後葉	長頸壺	完形	採集
27	池上曾根	泉大津市・和泉市	後期中葉	長頸壺	完形	井戸
28			後期中葉	長頸壺	完形	井戸
29			後期中葉	長頸壺	完形	土器堆積
30			後期中葉	長頸壺	口縁部欠損	土器堆積
31	下池田市	岸和田市	後期	壺	破片（肩部片）	—
32			不明	壺	破片（肩部片）	側溝



図1 池上曾根遺跡位置図

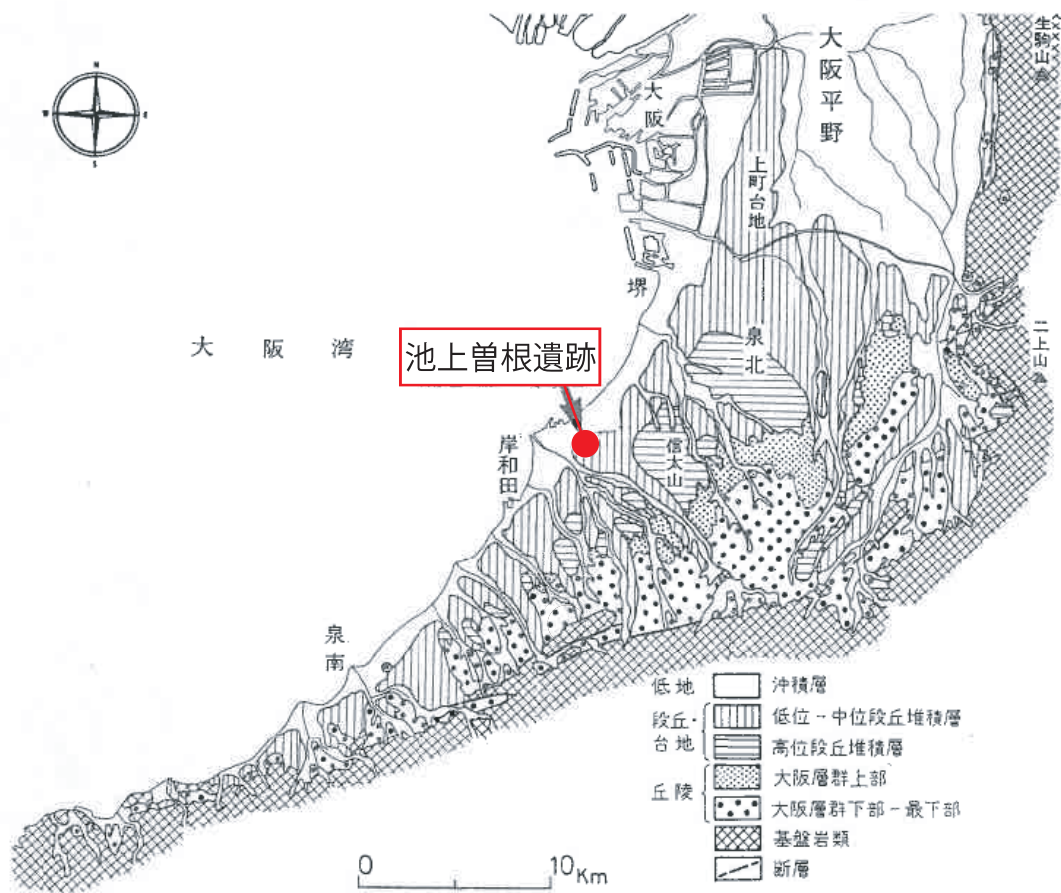
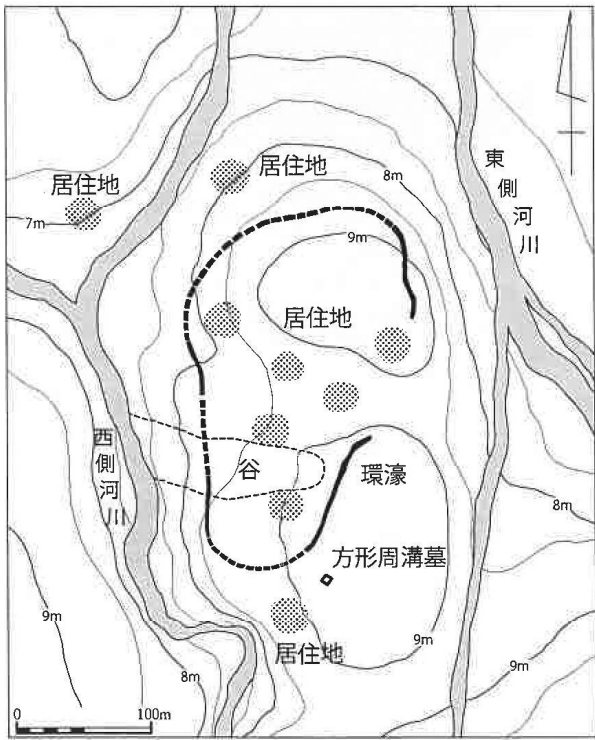
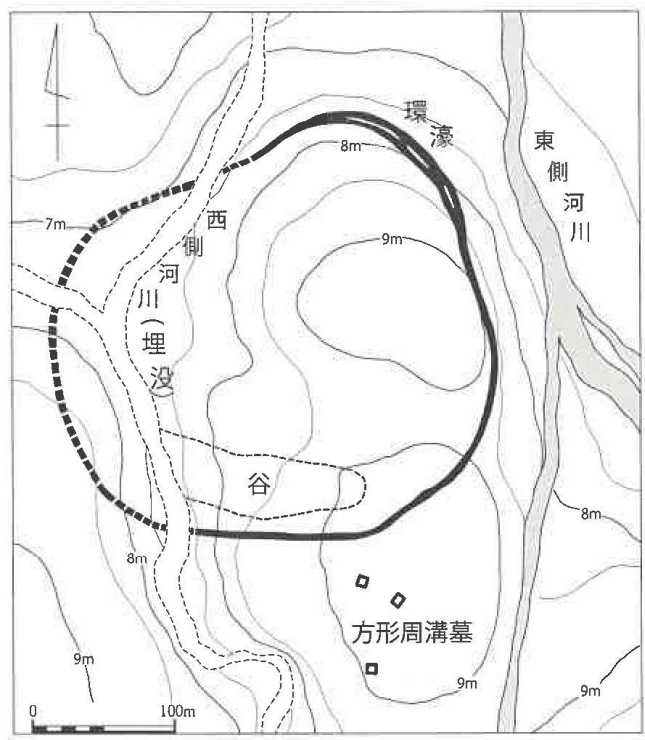


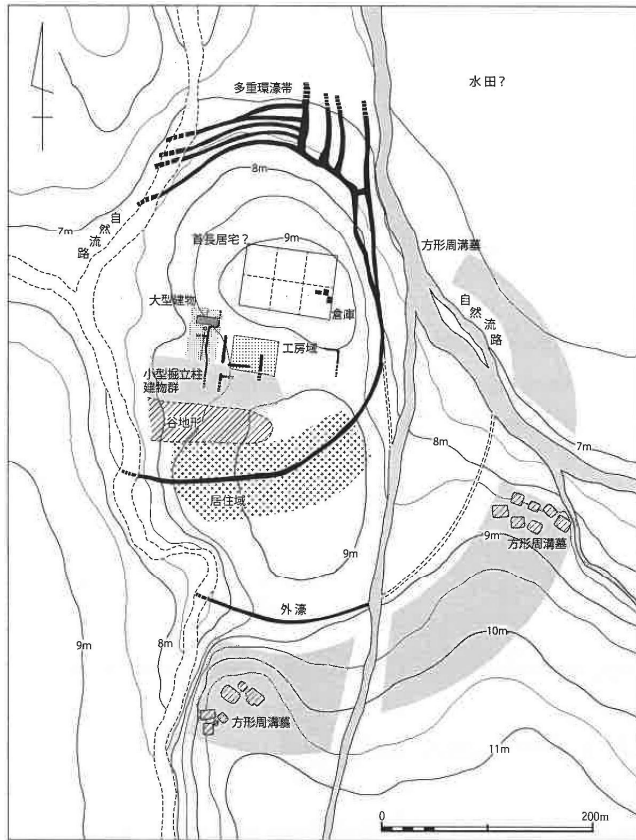
図2 池上曾根遺跡周辺の地質概略図



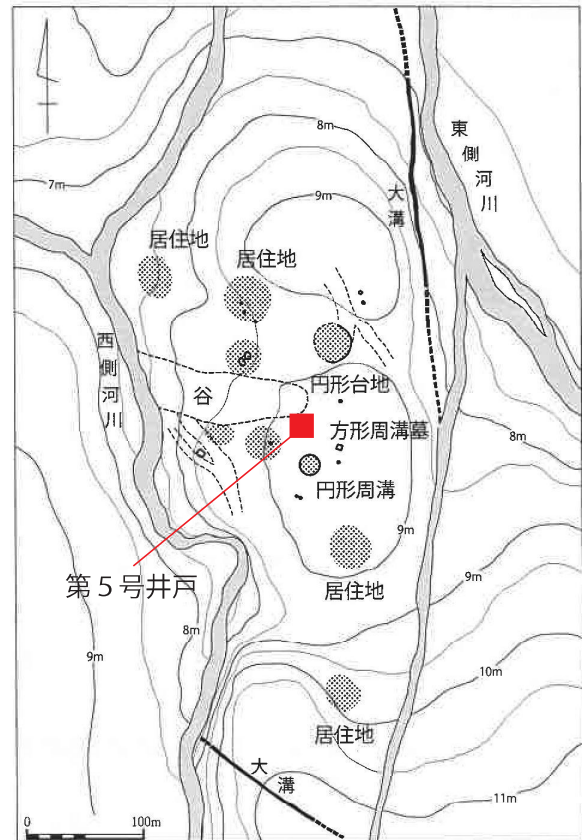
前期中葉



中期前葉~中葉



中期後葉



後期

図3 集落変遷図

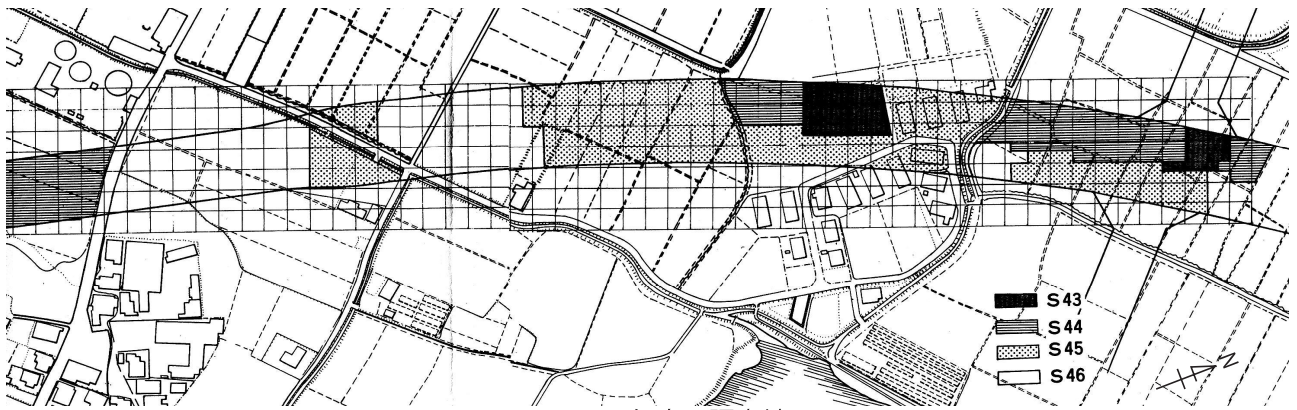


図4 1970年度の調査地区

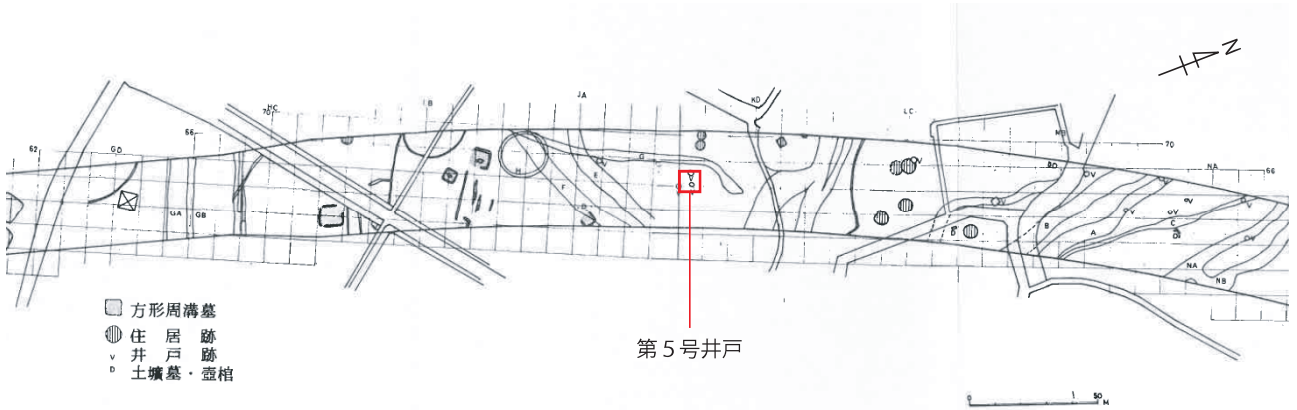


図5 第5号井戸検出地点

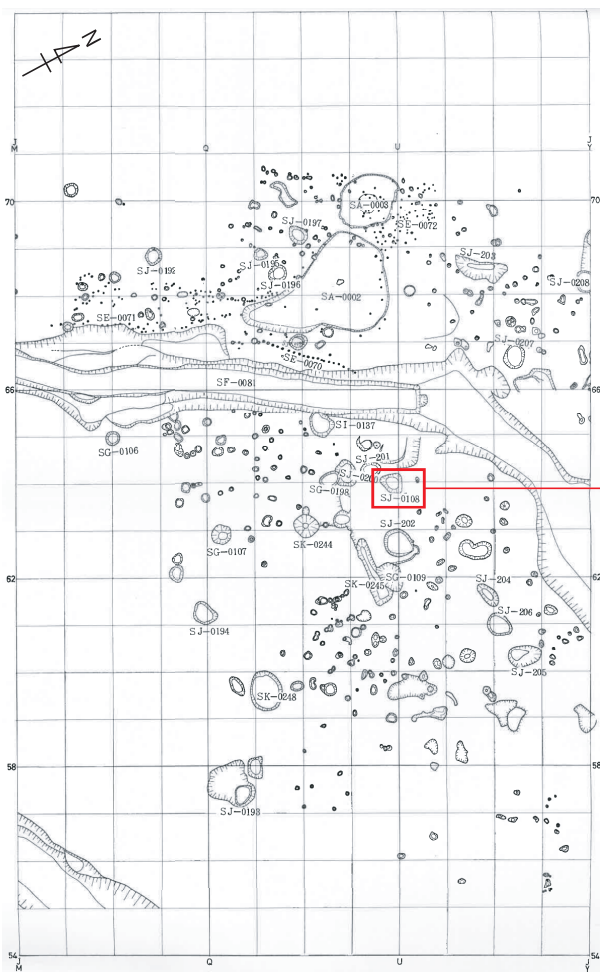
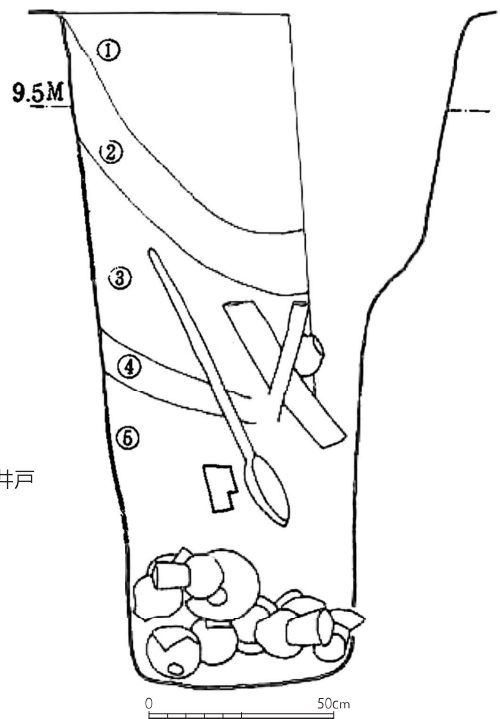


図6 遺構平面図



- ① 黒褐色土
- ② 黒色粘質土
- ③ 黒色(褐色素)粘土
- ④ 灰黒色砂質土
- ⑤ 黒色腐植土

図7 第5号井戸土層断面図

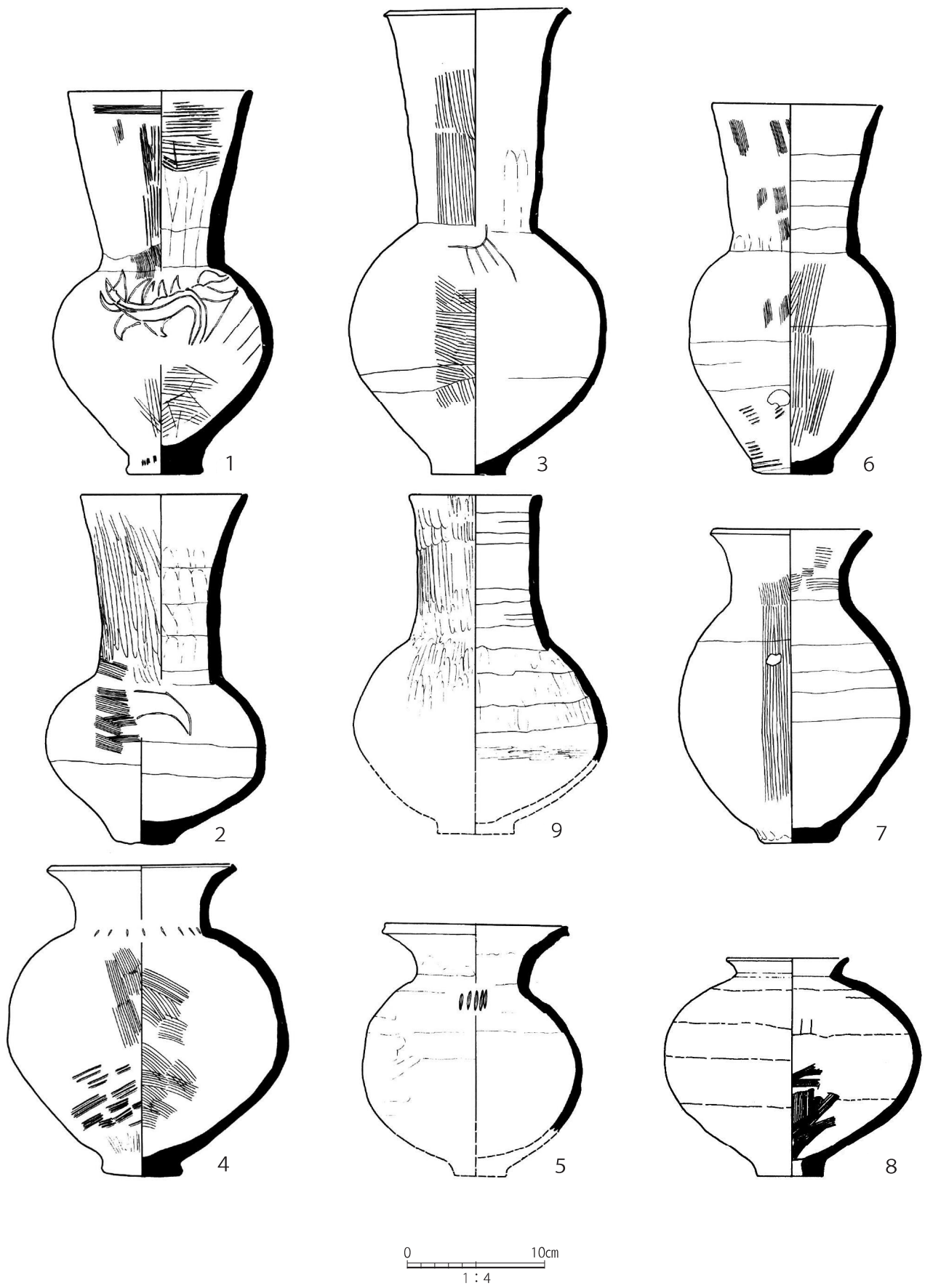


图8 第5号井戸出土土器

指定4-11



图9 第5号井戸土器出土状况写真



图10 第5号井戸土器出土

指定4-1



図11 土器1の絵画



図12 土器1の記号



図13 土器2の記号



図14 土器3の記号



図15 土器4の記号



図16 土器5の記号